

(公財) 中村元東方研究所 / 東方学院

東方だより

平成26年度 後期号 (通号 第25号)

〒101-0021

東京都千代田区外神田 2-17-2

延寿お茶の水ビル 4階

tel 03-3251-4081

fax 03-3251-4082

URL <http://www.toho.or.jp>

目次

理事長ご挨拶	1頁
中村元博士生誕一〇〇年記念事業 御寄附者芳名録	2、3頁
研究員・講師・研究会員の声 / 新講師・新講座	4、6頁
ご報告とご案内	7、9頁
事務局から / 新刊案内	10頁

大事業を終えて

理事長 前田 専學



過去三年間にわたる中村元博士生誕一〇〇年記念事業は、昨年十二月をもちまして恙なく成功裡に円成致しました。ここにご報告出来ますことを大変に有り難くまた嬉しく存じております。

去る平成二十三(二〇一一)年七月、熟慮の末に生誕一〇〇年記念事業を推進することを決心し、漸く「中村元博士生誕一〇〇年記念事業実行委員会」が発足することになりました。その間に安来の清水谷善圭清水寺貫首に、中村先生のご生誕地であり、生涯愛された松江に、先生のご蔵書を取めることができる中村元記念館の設立と東方学院松江校の開設という無理なお願いを申し上げ、幸運にも、平成二十三年一月、特定非営利活動法人中村記念館東洋思想文化研究所(理事長・清水谷善圭)が設立されました。それ以来、私共は力を合わせて、中村先生のご遺徳を思慕する大勢の方々からのご支援を得て、日本の各地で、生誕一〇〇年の様々な記念事業を展開して参りました。

最初の大事業として、一昨年の十月十日、先生が亡くなられたご命日に、先生のご生誕地である松江市に中村元記念館(館長・前田専學)を創立して、その中に先生の書斎を復元し、ご蔵書三三、〇〇〇冊や先生のご遺品などを納め、昨年の四月からは、記念館に東方学院松江校を開校し、活動を開始致しました。

中村元記念館は、現ワドワ・インド大使が二度も訪問され、「感動し、驚いた。記念館は印日交流の象徴的な殿堂」と高く評価され、山陰地方の主要な政界・財界・文化人からなる山陰インド協会の設立の契機となり、今や島根・鳥取両県の日印交流の要となっております。

また中村元記念館の東洋思想文化研究所は、島根大学、県立島根大学のみならず、東京の立正大学、大正大学、東大インド哲学仏教学研究室、東洋大学、武蔵野大学、関西の龍谷大学、大谷大学、仏教大学と提携して当地の東洋思想文化の研究と普及を促進し、また今年度から「中村元東洋思想文化賞」を設け、私ども中村元東方研究所の協力のもとに、若い世代への研究の啓発・助成ができるようにと計画しております。

このように無謀とも思えた諸事業をも実現し、想定以上の展開ができてきたことは、ひとえに本事業の趣旨にご賛同下さり、尊いご懇志をお寄せ下さった皆様方の、中村先生に対する強く深い思慕の具現化に他なりません。本当に有り難うございました。皆様方に私どもの心からの謝意を表するために、次ページにご芳名を記し、また中村先生が東方学院で昭和六十三(一九八八)年度に行われ、機関誌『東方』に掲載された「仏教入門」の名講義を『中村元の仏教入門』(春秋社)と題し、「中村元博士生誕一〇〇年記念出版」として、特別に作成し、お贈りいたしました。

私どもは、これからも、中村先生が、その第二の人生を捧げて、「東洋思想の研究と普及」を通じて実現されようとした高邁な理想の実現に向かって一層の努力精進をして参る所存でございます。どうか今後とも、ご支援、ご協力を賜りますようになにとぞよろしくお願い申し上げます。

平成二十七年二月二十三日



中村元博士生誕一〇〇年記念事業

― 御寄附者芳名録 ―

特別御寄附

三木純子殿
三好慈子殿

以上二名

一〇〇万円以上

愛染堂 奥田聖応(清明)殿
宗教法人一心寺殿
加藤純草殿
川崎信定殿
願照寺山口恵照殿
株式会社山陰合同銀行殿
寿徳寺 新井京子殿
真宗大谷派(東本願寺)
親鸞仏教センター殿
崇禪寺殿
千綿道人殿
公益財団法人
東洋哲学研究所殿
奈良康明殿
(社)日本移動教室協会
入江 真殿
日本印度学仏教学会殿
念法眞教 桶屋良祐殿
比良竜虎殿
公益財団法人 仏教伝道協会殿
保坂俊司殿
前田專學殿

三〇万円以上五〇万円未満

赤井士郎殿
一畑電気鉄道株式会社殿
大本山 成田山 新勝寺殿
花岡秀哉殿
深井 秋子殿
三友量順殿
妙行寺 高橋堯則殿
妙勝寺 高松孝行殿
葉師寺(隣山会)殿
以上九名

一〇万円以上三〇万円未満

浅井泰範殿
朝枝実明殿
阿部敦子殿
阿部慈園殿
飯岡祐保殿
石田祐雄殿
一島正真殿
今西順吉殿
瓜生津隆真殿
恵倫寺 佐藤憲晃殿
岡 信美殿
岡田真美子殿
奥住 毅殿
貝原義人殿
金田泉殿
金田静江殿
川崎大師平間寺殿
木村清孝殿
清川容子殿
倉田治夫殿
黒川文字殿
小林和子殿
古村けさじ殿
斎藤 敬殿
西徳寺 千賀正榮殿
西来寺 大塚睦子殿

佐藤宗秀殿

山陰中央テレビジョン放送
株式会社殿
柴田高志殿
志村文世殿
株式会社 春秋社殿
淳心会殿
聖天山歓喜院院主
鈴木英全殿
SINGH CURAKSHH 殿
末木文美士殿
学校法人清風学園殿
浅草寺殿
全日本経営人間学協会
理事長 竹内日祥殿
崇禪寺 西岡秀爾殿
高橋堯英殿
高橋堯昭殿
田上太秀殿
竹田軍郁殿
武田幸子殿
立川武蔵殿
龍口明生殿
龍口恭子殿
田中公明殿
田辺和子殿
谷口昌彦殿
中央学術研究所殿
長林寺矢島道彦殿
東光院殿
中田直道殿
長野市南長野仏教会
(会長 横山高徳)殿
中原芳子殿
中村久夫殿
奈良修一殿
成原要潤殿
西川高史殿
新田雅章殿

日本ヨリガ学会会長

田原豊道殿
宗教法人日本ヨリガ禅道院殿
沼田智秀殿
野津 勤殿
藤原新太郎殿
北条賢三殿
細田耕道殿
堀内伸二殿
前田式子殿
正木晴彦殿
有限会社松江自動車用品商会
代表取締役 池淵功二殿
松久保秀胤殿
妙興寺 岡田行弘殿
森田禅朗殿
好井瑞院殿
吉田宏哲殿
吉野恵子殿
蓮香寺住職(南長野仏教会)
樋口誠順殿
渡邊寶陽殿
以上八〇名

取締役頭取 田頭基典殿

下重好正殿
釈 悟震殿
酬佛恩講殿
常圓寺 角田泰隆殿
聖光寺殿
真宗大谷派(東本願寺)
親鸞仏教センター
本多弘之殿
菅沼莊二郎殿
高崎直道殿
田村晃祐殿
東光寺 北條賢三殿
日本交通株式会社殿
念佛寺 伊藤重敬殿
萩野孝昌殿
服部育郎殿
花山多賀江殿
濱川量子殿
羽矢辰夫殿
平岡英信殿
細野邦子殿
堀 美佐子殿
一般財団法人
本願寺文化交流財団
理事長 大谷暢順殿
松久保伽秀殿
松田愼也殿
松本照敬殿
丸井 浩殿
茨田通俊殿
萬福寺 安本利正殿
水野善文殿
身延別院代表役員
藤井教公殿
養輪頭量殿
宮元啓一殿
森 祖道殿
森本公誠殿
由木義文殿
吉田陽子殿
真言宗智山派龍光寺
堀江順司殿
和田壽弘殿
以上五六名

一万円以上五万円未満

秋葉佳伸殿
東 豊久殿
安達俊英殿
新井美枝子殿
新井泰夫殿
栗野芳夫殿
安藤嘉則殿
有限会社 井谷賀造園殿
石井清純殿
石山智殿
石渡達殿
泉登志子殿
板沢 順殿
株式会社一畑トラベルサービス
代表取締役 春日稔和殿
稲田玉純殿
稲田俊慶殿
稲葉珠慶殿
石上智康殿
岩松浅夫殿
岩本光司殿
上野敬子殿
宇杉玲子殿
内田伊津子殿
江頭輝美殿
N T T 西日本島根支店
杉島辰海殿

五〇万円以上一〇〇万円未満

佐藤宏宗殿
真如苑殿
徳清寺 吉田魚彦・梓・哲殿
本龍寺 伊藤 瑞叡殿
命徳寺 多田孝正殿
津田眞一殿
以上六名

五万円以上一〇万円未満

有馬頼底殿
株式会社一畑百貨店
代表取締役社長 大谷厚郎殿
今宮戎神社宮司 津江明宏殿
石上和敬殿
岩崎錦作殿
植木雅俊殿
宇治谷 顕殿
大谷光真殿
沖本克己殿
黒田大雲殿
公益財団法人克念社殿
後藤一敏殿
小林圓照殿
小林節子殿
小山典勇殿
佐々木玄智殿
慈光院 戸田 忠殿
四天王寺殿
株式会社島根銀行

以上五六名





遠藤 康殿
大石雄介殿
大澤聖芳殿
大澤まさみ殿
太田正孝殿
大野善宏殿
有限会社大橋館代表取締役石
飛博正殿
大堀由美殿
岡崎英雄殿
山下博司殿
岡光(山下)信子殿
奥田洋子殿
奥平龍二殿
奥村素子殿
小野俊彦殿
尾山美知子殿
風間富士子殿
勝本華蓮殿
桂 紹隆殿
加藤純一郎殿
金岡秀郎殿
金岡玲子殿
カナツ技建工業株式会社
代表取締役社長金津任紀殿
亀井 直殿

荻谷定彦殿
川口弘人殿
菅野博史殿
木暮利夫殿
北田信殿
吉祥院 塚原昭応殿
吉祥院 塚原亮応殿
木村仁太郎殿
木村 紫殿
木村隆徳殿
久保田磯子殿
久保田榮造殿
藏本桂子殿
黒田用子殿
小泉宗之殿
廣澤寺 小笠原隆元殿
河野特許事務所 河野 誠殿
幸陽建設株式会社殿
株式会社コスモブレイン
代表取締役 大内 茂殿
古泉 圓順殿
株式会社コダマ殿
有限会社後藤会計事務所
代表取締役 後藤 勇殿
小林智夫殿
小林 守殿
小峰啓督殿
金光教泉尾教会殿
近藤良一(聖欣)殿
齋藤 明殿
齋藤 博殿
西念寺 井手 恵殿
西福寺 宮澤 正順殿
坂田貞二殿
佐久間留理子殿
桜井瑞彦殿
佐古亮尊殿
佐々木敬易殿
佐々木敬夫殿
笹原益子殿
定方 晟殿
佐藤行教殿
佐藤文一殿
佐藤正昭殿
澤井義次殿

山陰水道工業株式会社
代表取締役社長坂根 勝殿
山陰総合リース株式会社殿
残間庄造殿
志田 泰盛殿
柴田 勝殿
柴田美穂子殿
嶋崎啓子殿
嶋田外志夫殿
島村 大心殿
清水晶子殿
下田勇人殿
常光寺 堀越教之殿
白山 肇殿
宗教法人真行寺 武田浩学殿
真宗大谷派(東本願寺)
親鸞仏教センター
大江 覚成殿
真宗大谷派(東本願寺)
親鸞仏教センター
金石 励成殿
真宗大谷派(東本願寺)
親鸞仏教センター
鈴木 真記殿
真宗大谷派(東本願寺)
親鸞仏教センター
中津 功殿
新免光比呂殿
菅井 禮殿
鈴木 清子殿
鈴木 知子殿
清光寺 高橋 審也殿
宗教法人清泰寺 志田進盛殿
関 稔殿
世尊院 大澤 聖寛殿
瀬間 信子殿
宗教法人 宋雲院
代表役員 山本文溪殿
総持寺 小峰 立丸殿
大雲寺 西城 宗隆殿
高橋尚夫殿
武田信光殿
武田宏道殿
武田 龍殿
田嶋 修殿

田中ケネス殿
田中 緑子殿
田中 良昭殿
田中 勝美殿
田丸 守也殿
田丸 淑子殿
田村 久雄殿
千葉 孝男殿
千葉 よし子殿
塚原 順元殿
佃 宣昌殿
辻 富美代殿
鶴谷 志磨子殿
(株)展勝地代表取締役社長
軽石 昇殿
洞雲寺 田崎 義章殿
宗教法人唐招提寺殿
當間 哲也殿
常磐井 鸞猷殿
(株)徳育経営研究所
狐墳 英毅殿
徳田 睦子殿
戸田 裕久殿
鳥羽田 重光殿
富岡 修一殿
富田 順子殿
鳥山 玲殿
土井 沙織殿
株式会社永江製粉代表取締役
永江 宏殿
長崎 法潤殿
中島 尚志殿
中谷 信一殿
中谷 みはる殿
中野 秋鹿殿
中野 友美殿
中野 美枝殿
中村 行明殿
中村 仁殿
中山 静麿殿
西尾 秀生殿
西岡 朱美殿
西谷 矩子殿
西村 実則殿
西山 多寿子殿

端 紀夫殿
畠中 光亨殿
馬場 昌平殿
濱川 香雅里殿
原 秀一殿
日隈 威徳殿
久富 幸子殿
日野 顕正殿
平井 恭子殿
平井 俊榮殿
平岩 阿佐夫殿
平賀 重司殿
平木 光二殿
平野 栄子殿
広瀬 智一殿
福井 淑恵殿
福士 明秀殿
福正寺 木本 清玄殿
福田 宗矩・知子・麻里殿
福田 亮成殿
福留 順子殿
福原 正直殿
宝光院 栗山 明高殿
法融寺 那須 礼子殿
曹洞宗宝林寺 大海 修一殿
細川 暢彦殿
牧瀬 千穂子殿
増原 良彦殿
松江京店商店街協同組合
理事長 森脇 宏殿
松田 祐子殿
松野 純孝殿
松野 進殿
松村 淳子殿
松本 敏殿
松本 史朗殿
松本 正行殿
の場 裕子殿
三浦 茂殿
水越 正彦殿
水谷 俊一殿
密乘院 須佐 知行殿
宮村 敏彦殿
妙幸寺 関戸 堯海殿
妙法院門跡 菅原 信海殿



向井 亮殿
村上 徳樹殿
村田 良平殿
森田 幸子殿
森田 俊和殿
森田 英仁殿
安來 賢吉殿
山口 瑞鳳殿
山口 泰司殿
山崎 弘道殿
山崎 良雄殿
山田 一信殿
山田 輝幸殿
山田 泰子・平野 久仁子殿
山本 幸殿
神 和順殿
湯山 明殿
吉岡 成十省殿
吉岡 陽子殿
吉次 通泰殿
天台宗来迎院 岩城 英規殿
蓮華寺 網代 裕康殿
若桜 木典孝殿
渡辺 彰殿
以上二三八名
合計寄附者 四一〇名

研究員・東方学院講師・研究会員の声



きせつふう くカフェテラスく

専任研究員 佐藤宏宗

トンボに、チョウチョに、バッタさん、

ねえ、ねえ、おばあちゃん、これ、お豆さん？

麦藁帽子をかぶって祖母と一緒に畑仕事、土の香いっぱいの記憶にはいつもやさしく寄り添う風の調べがあります。生まれ育ったのが琵琶湖の辺ということもあり、私は幼い頃から生きものが大好きで、一日中琵琶湖に生息する生きものや葦原に集まる野鳥や水鳥などと戯れる子供時代を送ってきました。たくさん生きものたちと一緒に過ごす時間は、風の薫り、水の温もり、土の温もり、草木の匂いなどで満たされていて、夏の畑で太陽をいっぱいに浴びた温かなトマトをもいで口いっぱいにほおばったときはきらきらと輝いています。五十歳を過ぎても棚田のあぜ道や湖辺で風や草花やいろいろな生きものたちと一緒に過ごす私を見て、妻はよく笑います。

中村元先生が掲げられる現代の寺子屋の基礎となる精神に則り、参加者の方々と中村元東方研究所研究員とのそれぞれの垣根を取り払った座談会形式の東方学院公開研究会講座「中村元インド哲学カフェ」を立ち上げて六年になります。この活動を開始した大きな理由は田舎の山と湖との中で自由に過ごしてきた私の幼少時代からの思考が強く影響しているのかも知れません。そして、この思いに心から楽しんで一緒に歩んで下さる研究員仲間全員の思いが共にあったということが揺らぐことのない事実です。

「カフェ」という誰もが気軽に立ち寄れる場所には、インド学、仏教学関係者のみならず、医療関係者、薬学関係者、ギリシア哲学やその他の西洋哲学関係者、ピアノの先生、舞踊の先生、教育機関関係者、ヨガ指導者、仏師、主婦、会社員、大学院生、大学生、小中学生、各国からの留学生、自営業関係者、寺社関係者、公務員をはじめとします様々な方々が集ってきて下さります。そして、その誰もが生きいきと輝いた瞳でそれぞれの生きさまを自由自在にこの憩いの場で楽しむひときは、まるで空を飛ぶ鳥や、川を泳ぐ魚や田んぼの蛙、そして、野山を駆け巡る様々な動物やトンボや蝶などの生きものすべてが一緒にあってそれぞれの命を精いっぱい輝かせている鮮やかな瞬間です。

この自由な場に集う人たちそれぞれの息づかいから自然に生まれてきた「ヨーガの世界」というトピックは、「中村元インド哲学カフェ」の象徴ともいえます。

インドという大地を多様な命あふれる息づかいで楽しめるところ、それが「中村元インド哲学カフェ」の素敵な魅力だといつか語り継がれるようになり、「ねえ、ねえ、カフェにいった？」という会話がトレンドのようです。土の香ほのかな陽だまりを奏でる風の調べはいつもやさしく寄り添ってくれています。

犀の角のごとく

専任研究員 加藤みち子



「ひとびとは自分の利益のために交わりを結び、また他人に奉仕する。今日、利益をめざさない友は、得がたい。自分の利益のみを知る人間は、きたならしい。犀(さい)の角のようにただ独り歩め。」(中村元訳『ブッダのことば』、スッタニパータ 岩波文庫) これは、大学一年生のときに私が最も感銘を受けた言葉の一つです。当初は西田哲学に憧れ、大学では哲学科に入学したのですが、右も左もわからず多読乱読を進めるなかで、胸を打ったのが右の言葉でした。深い意味はわからないながらも、人間社会をしっかりと見つめつつ、一人高潔に歩む、そういう生き方のことながら言っているのであろうと受け止め、それが仏教の言葉であると知って、おぼろげながら仏教の勉強をしたいと思うようになりました。

漢文で書かれた仏典を覚束ない手つきで読み始めたところから、修士論文・博士論文を書き上げるまで、いつも私の支えであったのは中村先生の翻訳された『ブッダのことば』であり、中村元著『仏教語大辞典』(東京書籍)でした。西洋哲学専門の先生を中心に構成される哲学科で仏教の勉強を続けることは、「犀の角のごとく一人」の孤独な作業でした。

私が研究テーマとしたのは、江戸時代日本の仏法者、鈴木正三(一五七九～一六五五)の思想です。鈴木正三は、中村元先生が高い評価を与える日本人仏教者の一人です。先生は、『近世日本における批判的精神の一考察』(一九四九年)の中で、農民や商人などの日常的職業活動を仏道修行となしうる、という鈴木正三の「仏教的職業倫理」を高く評価しています。私は、中村先生の御著書を座右に置きながら、現代日本の、ごく普通の人々の日常生活の糧となる仏法のありかたを勉強させていただいております。

このように、インド学・仏教学とは異なる畑で育った、いわば野育ちの私が、ご縁に導かれ、中村元先生の名を冠する本研究所の研究員とさせてくださったのは二〇一〇年、今から五年前のことです。残念ながら生前の中村元先生に直接お目にかかったことはありませんが、学問的にもスピリットの面でも、私は中村元先生に、はかり知れぬ恩恵をうけていると感じています。しかしそれでも、学問の道は孤独です。「犀の角のようにただ独り歩め。」中村先生の、そして釈尊の言葉に導かれながら、本研究所の諸先生方、先輩方に学ばせて頂きつつ、これからも精進して参りたいと考えています。

報恩感謝

東方学院 (関西校) 講師 西岡秀爾



佐藤宏宗両研究員をはじめ諸先生方には非常に温かく迎え入れていただきました。

例えば、月一回行われている関西在住の研究員の交流の場である「東洋思想研究部会」という勉強会でも、私の居心地が良いように、あえて生死の問題や生命倫理を会の中心テーマとして据えて下さいました。その場での各研究員の学問に対する真摯な姿勢から、常に多くのことを学ばせていただいております。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

また、二〇〇九年四月からは非常に光栄なことに、東方学院関西校において「死生学」に関する講座を開かせていただいております。「現代の寺小屋」と呼ばれている東方学院の受講生(研究会員)は、「真に学びたい」という熱意に溢れた方々です。したがって、この東方学院の教室は、「教育(教える)育てる」というより「共育(共に育つ)」の場であると、受講生との出会いの度にますますこの感を深くしております。

私は、誠に残念ながら生前の中村元先生にお会いすることはできませんでした。しかし、ご著書や映像を通して今現在も多くの学恩を受けております。さらに、この八年間で先生と親交のあった方々と多く知り合う機会に恵まれました。特に、東方学院の広報誌「東方だより」(年二回発行)を第十二号(二〇〇八年秋号)から第二十三号(二〇一四年春号)まで、中村先生のご息女である三木純子編集長の下でその作業の一端を担わせていただいたことは大きな宝となりました。紙面作りを通して、中村先生を慕う多くの講師・研究員・研究会員の方々とご縁をいただきました。改めて中村先生のご人徳の高さを伺い知ると共に、先生の「慈しみの心」が今に受け継がれていることに深い感銘を受けました。

私もこれまでの学恩に少しでも報いるために、未熟ながらも「慈しみの心」を持って歩み続けていきたいと思います。

2015 年度 東方学院 新講師・新講座のご案内

- ★ 東方学院では、開講講座の編成に随時見直しを加えながら ★
- ★ インド思想や仏教の分野を中心に ★
- ★ 時宜にかなったテーマ ★
- ★ 話題の講師による連続講座など ★
- ★ 東方学院ならではの講座を例年、新規に開講しています。★

☆ 2015 年度の東京本校では、中国仏教の大家である **木村清孝** 講師による「**中国仏教の思想と文化**」が始まります。初めて仏教を学ぶ方にもわかりやすい中国仏教の貴重な講義です。中国仏教に興味のある方はもちろん、これまでインド仏教や日本仏教を学んでこられた方にもぜひおすすめです。

☆ 実習部門では、仏さまを描く「**仏画入門**」(山田美和講師)が始まります。下図をなぞっていく写仏から始めて正式な仏画を学びながら、ご自分の仏を描いていきませんか。「**坐禅の実習と『正法眼蔵』の提唱**」(来馬正行講師)も始まります。実際に坐禅を行い、『正法眼蔵』の講義を受けられる貴重な機会です。関西校では、日本仏教・宗教思想史で著名な **末木文美士** 講師が「**禅籍講読**」(月 2 回)が始まり、インド仏教の **佐々木閑** 講師による「**インド仏教の教えと実践**」(集中講義)が開かれます。両講師とも多くの著作を出版して人気を博している、現代日本を代表する仏教学者です。めったにきけない東方学院ならではの貴重な講義です。ぜひこの機会にご受講ください。

☆ 中部校では、**立川武蔵** 講師による「**空の思想-『中論』を読む-**」がひらかれます。大乘仏教の基礎となった龍樹(インド、2~3 世紀)の著作から、空の思想を考える講座です。毎年人気の **サンスクリット語講座**(佐久間留理子講師)は、初級と講読の 2 クラスがひらかれています。今年の「**原始仏教の思想**」(服部育郎講師)は、古代インド当時のブッダが説いた教えの核心に迫ります。

★ はじめての方から専門の研究者まで、皆さまのご参加を心よりお待ちしております ★

「東方学院とわたし」

研究会員 (東京本校) 大塚 睦子



私と東方学院の出会いはいきわめて偶然でした。

今から十数年・・・いや数十年前に遡ります。何となく女子大生になった私は書店である書物を取りました。タイトルは「日本人の思维方法」。言わずと知れた中村元先生の名著です。早速購入し、読み始めるとすぐ夢中になりました。でも当時先生の御名前すら知らず略歴もちゃんと読まなかった私は「文章が若々しいから三十代の研究者なんだろうな。それにしてもすごい人がいるもんだ。」と勝手に若々しい新進気鋭の研究者という人物像を作り上げていました。何週間か持ち歩いていましたが、あるとき大学の授業中に咳きか止まらなくなり医務室に行きました。するとそこで処置して下さった(六十〜七十代であろう)女医先生が私の本を見て「アラこれ私の主人の本よ。」とおっしゃったのです。何と私が通っていた大学の校医先生が中村元先生の奥様、中村洛子先生だったのです。

洛子先生は「東方学院というのをやっているから」と後日パンフレットを持ってきて下さいました。奥様の紹介と云うことがあって面接もせずに入会させて頂くことになりました。ほぼ同時に、大学に客員教授としていらしていた前田専學先生の「インド哲学史」の講義も取ることもできました。こうして大学では前田先生、東方学院では中村先生の講義を受けるといふ今から考えるとあまりにも贅沢な日常がスタートしたのです。でも当時はそんなことは考えずに、ただただ深い知識に接するのが楽しくワクワクしていたのを憶えています。

就職や結婚などがあって何度か中断しましたが中村先生の最後となる講義も受けています。次第にお褒れになっていく中村先生の講義を聴講生一同胸が締め付けられるような思いで聴いていたのを昨日のように思い出します。

その後出産や子育てがあり中断していましたが、昨年前田先生の講義に参加することができるようになりました。

長い間受講していると中には、本を出版し研究者となった人もいます。でも私は相変わらず一介の主婦に過ぎません。未だ専門用語に苦戦すらしています。では私は先生方の講義から何を得ているのか・・・それは第一に「自分の依るべきものがある強さ」です。インド哲学という根幹がある両先生方の視点はぶれないし、強く、あたたかい。そして第二には「考える姿勢」です。どんな言葉にも立ち止まって正面から向かい合い、深く丁寧に詳らかにしていく。例えば中村先生は「以」というよく見る漢字を説明するときさえ時に「うーん」としばらく沈黙し考え込むときがありました。

あまりにもたくさんさんの情報におし流されて、自分さえも分からなくなってしまうような現在、私が私でいられるのは両先生のおかげだと思っています。たくさんのかげがえのないものをしめしてくださった中村先生、寛容そして慈悲をまさに体現していらつしやる前田先生にどれだけ御礼を言ってもいい足りない思いです。東方学院での時間はわたしにとって、これまでも、そしてこれからもなくてはならないものなのです。

「東方学院との出会い」

研究会員 (関西校) 北村 昌子



「北村さん、楽しいですか？」

佐藤宏宗先生のこの問いから「般若経典を読む」の講義が始まりました。もしかししたら、それ程その時の私は、長年続けてきたヨーガの勉強にいきづまりを感じていた為、きつと閉塞感が顔に現れていたのかもかもしれません。

私のヨーガライフは、四半世紀前にカルチャーセンターで健康の為に始めたハタヨーガからスタートし、途中スタジオ系のヨーガと称された健康体操の時期も経て、後半はインド由来のハタヨーガに戻り現在に至ります。ヨーガライフを送るには、歴史に基づき構築されたリソースが必要不可欠だと思いの中、インドで生まれ培われてきたハタヨーガを日本人の私が理解していく過程で壁にぶちあたったわけです。

話は遡り、二〇〇八年に、アジア全域を視野に入れた精神性的の見聞と洞察とを深める為、インドとタイとで伝統的ヨーガ研究に取り組む先生や仲間と共にカンボジアのアンコール遺跡群を訪れました。その広大な敷地内にある巨大なヒンドゥー寺院跡やバイヨン寺院で、観世音菩薩の四面像とまみえた驚きの中で、「私は大乘仏教の何を知っているのだろうか」という思いと同時に、インドのヨーガを深く知らないままでも良いのかという疑問が湧き出てきたのです。それを機に、自分が納得出来る方法で識者の方からヨーガや仏教を学ぶ事が始まりました。

二〇一〇年に、近代ヨーガ発祥の地インド・マハーラーシュトラ州ロナワラにある「カイヴァリヤダーマヨーガ研究所」主催の「プラーナ・ナーヤマコース」を受講した際に、「ディプロマコース」在籍中の関西出身の明里知衣子さんとの出会いが、今日の東方学院での受講という有り難いご縁のきっかけになったのです。残念ながら彼女が、帰国後にご自分の進む道を見つけた矢先、若くして急逝されてしまいました。

その後、東方学院で沖本克己先生の「禅文献を読む」を最初に受講しました。私には少し難しい切り口のようにでしたが、先生は、私の初歩的な質問にも分かりやすく答え下さいました。そして、昨春から、佐藤宏宗先生の「般若経典を読む」の受講を始めて今日に至ります。かねてから受講したいと願いつつも、私にはまだまだハードルが高いかと思いつ断念していましたが、先生から御教示いただくサンスクリット語から読み解く『般若心経』の教えはシンプルで分かりやすいものでした。私を覆っていた心の殻がどんどん外れていくのが分かるほど毎週の講義が楽しくなり、ヨーガの理解も徐々に進んでいくのがよく分かりました。大切な知識を入れるだけではなくヨーガの実践であるという事、そして、その効果を体感していくことでよりヨーガへの理解が深まる気がしています。仏教も含めたインド起源の精神性に触れると同時に、ローカルな精神性にも触れて洞察を深めるという方向性で歩めば、私のヨーガライフも充実してくるのかなと思えるようになってきました。

昨年末、六年ぶりにアンコール遺跡群を再訪した際には、以前に感じた不安な感覚が無くなっており、これからは難しく考えることなく日々のヨーガを続けて行けそうな気にもなってきました。佐藤先生が、「迷ったら古典文献に戻ったら良いですよ。」と言われる事があります。本当に学ばば学ばばほどに湧き出る疑問点を解決してくれるのは、私にとっては、ハタヨーガからラージャヨーガへと繋がる古典思想であり、インド哲学の『ヨーガストラ』と共に『般若心経』がシンプルで良いとしみじみ思うこの頃です。

それから、講義の中で「大智」と「大悲」とのエッセンスを伝えて下さったこともあり、「大智」とは「この現象世界を如実に把握する智慧」のことで、そして「大悲」とは「その智慧の実践」のことと思うと説明して下さいましたが、このシンプルながら説明も日々の実践では大いに役立ち心が鎮まるものです。最後に、今は「佐藤先生、生活も学ぶ事も楽しいです。」と言えるようになり、中村元インド哲学カフェも含めた東方学院との出会いは、私にとって大きな財産になり感謝しております。

レポート案内

★2015年度 東方学院・鶴岡文庫共催

「教養講座」のご案内

「東洋思想から共生を考える」

【本講座の趣旨】

わたしたちの生きる時代は、人間と自然の調和、多様な価値観を認め合う宗教と文化の尊重、東洋と西洋の文明間の対話など、さまざまな意味で「共生」が提唱されています。なぜでしょうか。そこには、地球環境破壊や経済格差、それに続く宗教対立、思想的抗争が、今や地球全体に浸透し、文明の危機という深刻な状況があるからです。

「一切の生きとし生けるものどもに對しても、

無量の（慈悲の）ところを起すべし。」

中村元博士は、ブッダの慈悲の教えを人間が歩むべき道の基礎に据え、共生的思想の可能性を追求されました。こうしたことから、仏教をはじめとする東洋思想の伝統を、それぞれの専門の立場から今日的視点で捉えなおし、未来社会に向けて共生の道を拓く新たな手がかりを探究するために、このたびの講座を開設しました。

【場所】鶴岡文庫（鶴岡八幡宮境内）

【日程】原則 第四日曜日

（※但し五月、十一月、一月は第三日曜日）

一三時三〇分～一五時三〇分

【講座内容】

第一回 平成二十七年五月十七日

前田 專學（公益財団法人中村元東方研究所理事長・

東方学院院长／東京大学名誉教授）

「本講座の趣意説明」

丸井 浩（東方学院講師／東京大学教授）

「多宗教の国インド―多様性の中の統一―」

第二回 平成二十七年六月二十八日

佐久間 留理子（東方学院講師）

「観音信仰にみる共生的思想」

第三回 平成二十七年七月二十六日

鶴岡 真弓（多摩美術大学教授／

芸術人類学研究所所長）

「ケルト文化とユーロ・アジア世界の芸術・

信仰にみる「循環と再生」

第四回 平成二十七年八月二十三日

若松 英輔（批評家、『三田文学』編集長）

「中村元の仏教平和論」

第五回 平成二十七年九月二十七日

小松 優香（公益財団法人中村元東方研究所

連携研究員／筑波大学准教授）

「石橋湛山の思想から共生を考える

―「一」と「多」を中心に―」

第六回 平成二十七年十月二十五日

泉 三郎（作家、

NPO法人「米欧亜回覧の会」理事長）

「明治国家創成期における東西文明の相克と共生」

第七回 平成二十七年十一月十五日

加藤 みち子（東方学院講師）

「熊野古道の信仰と共生思想

―一枚の曼陀羅図を読み解く―」

第八回 平成二十八年一月十七日

佐々木 一憲（東方学院講師）

「大乘仏教における平和の思想と空」

第九回 平成二十八年二月二十八日

保坂 俊司（東方学院講師／中央大学教授）

「イスラームとの共生

―インド思想の智慧の可能性―」

第十回 平成二十八年三月二十七日

釈 悟震（東方学院講師）

「宗教対話による人類の共生を求めて

―宗教激変のスリランカを中心に―」

平成二十六年年度 芳名録（五十音順・敬称略）

※平成二十七年二月十七日受領分までを掲載しております。

維持会員

- 赤井士郎 史跡足利学校管理事務所 小笠原勝治 太田光美 川崎大師平間寺
- 川崎寿子 川崎信定 久間泰賢 来馬明規 久保継成 黒川文子 小坂機融
- 金剛院仏教文化研究所 清水谷圭 下重好正 釈悟震 春秋社 淳心会（日野紹運）
- 未廣照純 菅原信海 鈴木一馨 高崎宏子 高松孝行 多田孝文 田辺和子 田原豊道
- 田村晃祐 千葉よし子 千綿道人 奈良康明 成田山新勝寺 西岡祖秀
- 日本ヨーガ禅道院 羽矢辰夫 仏教書総目録刊行会 仏教伝道協会
- 法恩寺（藤原教文） 法清寺 前田專學 前田式子 松久保秀胤 三木純子 水野善文
- 三友健容 三友量順 武蔵野大学 安本利正 華王院（高尾山） 吉田宏哲 渡邊信之

賛助会員

- 秋葉佳伸 阿部敦子 石井勝彦 一月正人 稲葉珠慶 石上智康 入江省道 遠藤康
- 大海修一 大谷光真 小笠原隆元 荻山貴美子 奥住毅 軽石昇 金田静江 桂紹隆
- 川崎寿子 菅野博史 北村彰宏 木村清孝 窪田成円 久保田磯子 小峰立丸 小山典勇
- 近藤良一 櫻井瑞彦 桜井俊彦 定方辰 佐久間留理子 在家仏教協会 斎藤明
- 浄土真宗本願寺派本山山本願寺 末木文美士 須佐知行 鈴木勇介 関戸堯海
- 高橋審也 田上太秀 武田浩学 田中良昭 立花ひろ子 田村久雄 田丸淑子
- 鶴谷志磨子 東洋哲学研究所 徳育経営研究所 戸田裕久 東京書籍 常磐井鸞猷
- 長野市南長野仏教会 中山静磨 中村久夫 西尾秀生 西川高史 西宮寛 花岡秀哉
- 長谷川恵子 濱川香雅里 濱川量子 久富幸子 引田弘道 福留順子 福士慈裕
- 藤井教公 藤山覚一郎 堀江順司 堀越教之 松原光法 的場裕子 水谷浩志
- 水野善朝 宮元啓一 森祖道 矢島浩志 山田和伸 山口泰司 山本文溪 由木義文

東方学院後援会

- 一心寺 今宮戎神社 大神神社 奥田聖應 加藤公俊 健代和央 古泉園順 坂本峰徳
- 四天王寺 清風学園 瀧藤草津 塚原昭應 塚原亮徳 出口隆順 出口順得 唐招提寺
- 東大寺 念法真教教団 平岡英信 南谷惠敬 宮崎光映 森田俊朗 森田惇朗
- 山岡武明 吉田明良

御寄附（※中村元博士生誕一〇〇年記念事業へのご寄附とは別になります）

- 内田伊津子 片山一良 門脇英晴 加藤純章 川崎信定 克念社 小山典勇 田辺和子
- 高橋尚夫 多田孝正 當間哲也 中田直道 北條賢三 前田專學 松久保秀胤
- 松前幸雄 渡邊實陽

皆様からのご支援に心から御礼申し上げます。

★第二十四回中村元東方学術賞授与式

平成二十六年十月十日(金)、中村元東方学術賞の第二十四回授賞式が東京都千代田区のインド大使館において盛大に執り行われました。

中村元東方学術賞は当研究所の創立者・中村元博士にちなみ、東洋思想・文化の分野において成し遂げられた学術研究ならびに文化活動のすぐれた業績を広く世に顕彰するため、駐日インド大使閣下ご臨席のもと(写真上段右)、インド大使館との共催で開催している学術賞で、昨年で二十四回を数えました。

式典は学院歌「慈しみ」の演奏で華やかに開幕。授与式は例年、中村元博士の命日にちなみ十月十日に挙行されていることから、開会にあたって奈良康明常務理事を導師に来場者全員で三帰依文が唱和され、黙祷が捧げられました。

この度の式典では二名の研究者が受賞の榮譽を受けました(写真・上段左)。中村元東方学術賞、第二十四回の受賞者には、



大正大学教授・同大学総合仏教研究所所長の高橋尚夫博士が厳正な審査の末に選ばれました。博士の長年に渡るインド密教の宗教思想研究、さらにその成果を日本密教の思想研究に応用してあげられた数々の研究業績に加え、『維摩経』のサンスクリット語写本の発見とその出版・邦訳という業績が高く評価され、今回の受賞となりました。

また本年は高橋博士とならび、国際仏教学大学院大学名誉教授・フランス国立極東学院「法宝義林」前編集長のユベール・デュルト博士が「東方学術特別



顕彰」の榮譽を受けることとなりました。

デュルト博士が編集長として編纂にあたった『法宝義林』は、一九二六年より日仏政府の共同事業として編纂が進められた、中国・日本の資料に基づくフランス語の仏教百科事典です。デュルト博士は編集長としてご自身も多くの項目を執筆なさる傍ら、同時に

国内外の一流の専門学者を適切に選んで幅広く執筆を依頼し、同プロジェクトを通じて日本内外の仏教研究者達を結びつける役割を果たされました。中村元博士は常に学術文化の国際交流の必要を語り、それをみずから実践された方でしたが、デュルト博士はまさにその中村博士の理想を体現した方であり、東方学術特別顕彰にまことに相応しいとして、今回の授賞となったものです。

以上の受賞理由が前田専理理事長より紹介された(写真・中段右)のち、賞状および副賞の授与を挟み、駐日インド大使のディーパ・ゴパラン・ワドワ閣下、津田眞一・国際仏教学大学院大学名誉教授、加藤純章・名古屋大学名誉教授から受賞者両名に祝辞が贈られました。



授賞式終了後、インド大使館オーデトリウムでのホワイエに会場を移し、インド料理を並べての祝賀会が、高橋・デュルト両博士を囲みながら盛大に催されました。当研究所理事の川崎信定博士の乾杯に続けて、多田孝正・大正大学名誉教授、彌永信美・フランス国立極東学院東京支部代表が祝辞を述べ(写真・中段左)、受賞者両名の受賞を祝いました。宴もたけなわな中、吉田宏哲・大正大学名誉教授が中締め挨拶を述べ、華やかな宴の最後を締めくくりました。

★川崎信定理事が文化功労者として顕彰されました

文化功労者として顕彰されました



当研究所の理事で東方学術講師・筑波大学名誉教授の川崎信定博士が、「緻密な分析で、日本のチベット仏教と仏教思想に関する研究に新しい視点をもたらした」として、平成二十六年度の文化功労者に選ばれ、顕彰を受けられました。

文化功労者とは日本において、文化の向上発達に関し特に功績顕著な者をいい、文部科学大臣が候補者の選考を文化審議会に諮問し、その選考した者のうちから文部科学大臣が最終的に選ぶかたちで決定されます。優れた業績を上げた芸術家等の功績をたたえ、年金を給付し、将来にわたりその活躍を支えることを目的に設けられた国の顕彰制度です。

川崎博士は一九三五年千葉県船橋市生まれ。東京大学教養学部アメリカ分科卒。同大学院人文科学研究科印度哲学博士課程中退後、東京大学文学部助手(当時)。その後、インドのバンダルカル東洋研究所などに留学。帰国後、東洋文庫(現・公益財団法人東洋文庫)専任研究員を経て、昭和六十一年に筑波大学教授(現在、同大学名誉教授)。退官後に東洋大学教授も歴任。

ご専門はインド哲学・チベット仏教で、平成六年には「一切智思想の研究」で学士院賞を受賞されています。著書に『一切智思想の研究』(春秋社、一九九二年)、『インドの思想』(放送大学教育振興会、一九九三年)、『釈尊のおしえ』(中山書房仏書林、一九九七年)、訳書に『チベットの死者の書 原典訳』(筑摩書房、一九八九年のち学芸文庫に収録)があります。

川崎博士は長年講師として東方学院で講座を持たれており、二〇一五年度も「比較思想」と「チベット語仏典講読」の二講座を担当して下さる予定です。

★第十五回 東方学院・酬仏恩講

合同講演会 開催 (関西)



平成二十六年十一月二十九日(土)に、奈良西ノ京の薬師寺・まほろば会館(写真・上段右・まほろば会館全景/上段左・会館ホール入口)において、東方学院と薬師寺・酬仏恩講との共催による合同講演会が開かれました。この合同講演会は、公益財団法人中村元東方研究所の研究調査助成事業である「アジア諸国海外研究・調査助成」制度を利用して海外調査を行ってきた若手研究者の帰朝報告会を兼ねて開催されております。

報告、後半にはインド学・仏教学分野で注目を集めている研究者をお招きして、会場を提供して下さっている法相宗大本山薬師寺様にちなんだお話をさせて頂く講演という二本立て構成になっており、一日で仏教や東洋思想周辺の最近の研究動向、アジア事情を知ることができると毎年来場者より大変ご好評いただいております。

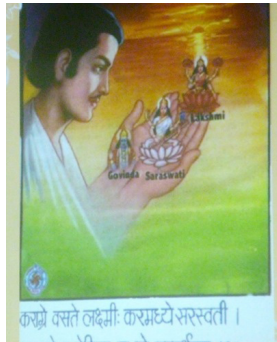
第十五回を数える今回は、バングラデシュで現地の部族仏教の祭礼を調査してきた龍谷大学大学院のバルア・シャントウ氏による「ラージ・カラム・パラボ——バングラデシュのオラオン部族コミュニティの民間祭礼——」と題する海外調査報告、続けて花園大学教授の佐々木閑博士による「仏教哲学における存在と認識——アビダルマ・俱舍論を読み解く——」と題する講演が行われました。

東方学院院长の前田専学・東京大学名誉教授より開会の挨拶

があったあと、途中休憩を挟みながらバルア・シャントウ氏が佐々木閑博士の順でお話がありました。シャントウ氏の報告は調査対象国バングラデシュ出身の同氏ならではの視点からなされた現地調査に基づいており、大変に新鮮で興味深く、佐々木博士の講演は、難解で知られる法相宗の教義的基盤・アビダルマ哲学をこれ以上ないというほど明快に解説して聴衆を大いに満足せしめました。

★第十二回中村元インド哲学カフェ 開催 (関西)

平成二十七年一月十一日(日)、大谷大学(京都市)にて、第十二回中村元インド哲学カフェ「ヨーガの世界——理論



と実践——(理論編)が、シヨバ・ラニ・ダーシユ先生(大谷大学)によって「インド東部 オディシヤ州における民間療法と健康管理」として開催されました。(写真・中段左・講演会場の様子)



インドのオディシヤ(オリッサ)地方では、現代においても、伝統的な療法が人々の健康維持や治療のために活用されていることが報告されました。まず、健康維持に関しては、生活習慣を整えることによって人間が本来もっている生命力や精神力を呼び覚ますという考え方が、その根底にあ

るようです。例えば、毎日、日の出一時間前に起床し、朝日を礼拝し、自分の掌の中に神々を見ることを行いますが(写真・中段右・映写された図解イラストの拡大写真)、それは太陽パワーをもらおうとともに、精神的に清らかな気持ちになり、心身の調子を整えるという効果があります。

また、治療に関しては、ダーシユ先生が幼い頃、水疱瘡にかかった時、祖母がニームの葉を水に漬け、その水を患部に塗ると、痒みもなく、また、疱瘡の痕も残らず完治したという話などが披露されました。現代の日本の医療では、データや投薬などに基づく西洋医学が重視され、このような民間療法を軽視する傾向がありますが、インドでは、西洋医学と並んで重要な治療行為として位置づけられていることも報告されました。

フリートークタイムでは、活発なディスカッションがあり、参加者全員が楽しいひと時を過ごすことができました。

★日本仏教教育学会 第二十四回学術大会

中村元記念館にて開催決定

仏教教育に携わる者の交流と情報交換を促進するために設立された全国組織・日本仏教教育学会(会長・矢島道彦・鶴見短期大学教授)の第二十四回学術大会が、来る十一月十四日、島根県松江市の中村元記念館を会場として開催される運びとなりました。

仏教教育学会は平成四年に設立された比較的新しい学会ながら、仏教教育に関わる幅広い分野の研究者・実践者を会員として、教理研究に偏らない実践的な仏教のあり方を世に問うべく、活発に活動する学術団体です。

一昨年の日本印度学仏教学会、昨年の比較思想学会につき、松江市は三年連続でインド学・仏教学関係の全国学会が開催する学術大会のホスト役を務めることになりました。

このニュースは、中村元記念館の設立により、中村元博士の出身地・松江が徐々にインド学・仏教学研究の一拠点として世に認められつつあることを示唆するものと言ってよいかもしれません。

事務局からのご案内

ご支援のお願い

公益財団法人中村元東方研究所・東方学院は、創立当初の目的を実現するために、多くの方々の善意によるご寄付と学問への熱情によって支えられて過去 4 4 年間 持続・発展して参りました。一昨年からは、東京本校・中部校・関西校に加えて、中村元記念館に松江校が開校し、創立者中村元博士の高邁な遺志を継承し、今後のさらなる発展を期するためには、広く皆様方からご支援・ご協力を得ることが必須不可欠でございます。

つきましては、当法人の趣旨に賛同されます皆様、是非次の 3 通りの方法の中のいずれかをご選択いただき、ご支援たまわりたく、ここに切にお願い申し上げます。

尚、当公益財団法人に対するご寄付は、税法上の優遇措置が受けられます事を申し添えさせていただきます。

(1) 一般寄附

一般寄附は会費と違い、金額や期限等を設定せずに、随時、受け付けさせていただいております。お寄せ頂いた寄付金は、当法人が取り組んでいるさまざまな活動に広く活用させていただきます。

(2) 継続ご支援(維持会員・賛助会員)

当法人の活動に賛同し、継続的に支援して下さる会員も随時募集しています。

- ・維持会員：一口 年 50,000 円
- ・賛助会員：一口 年 10,000 円

※上記、いずれかをお選びいただき、出来れば複数口をお願いできれば幸いです。

(3) 普通会員：年会費 7,000 円

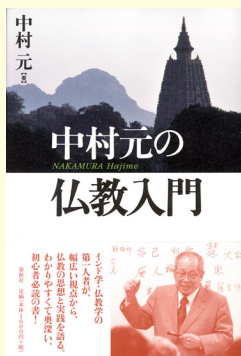
普通会員にも、維持・賛助両会員と同じく、定期刊行物『東方』の他、催し物、会合等のご案内をお送り致しますが、年会費には税の優遇措置は適用されません。

【所得税の減免について】

当法人は寄附金控除の対象となる証明を受けていますので、一般ご寄附及び維持会・賛助会の会費は、下記の通り、税法上の優遇措置の対象となります。

【所得控除】所得控除は、所得金額に対して寄附金額の大きい場合に減税効果が大きくなります。「その年の寄附金額－2 千円」が、課税される所得金額から控除されます。控除できる寄附金額は、その年の総所得金額等の 4 0 % 相当額が限度です。

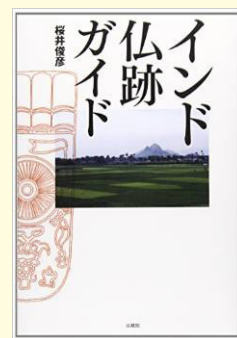
新 刊 案 内



★『中村元の仏教入門』中村元・著、春秋社、2014 年 12 月、1,728 円 (税込み)



★『古代インドの思想—自然・文明・宗教』山下博司・著、ちくま新書、2014 年 11 月、864 円 (税込み)



★『インド仏跡ガイド』桜井俊彦・著、法蔵館、2014 年 8 月、1,944 円 (税込み)

【編集/発行】

(公財) 中村元東方研究所

本部事務局(東京)

編集責任者 釈悟震

東方だより 平成 26 年度 後期号

(通号 第 25 号)

平成二十七年二月二十三日発行

公式ホームページのご案内 (http://www.toho.or.jp)

- ▶ 当研究所の目的・理念・あゆみ
- ▶ 中村元博士の略歴・業績・著作文献目録
- ▶ 東方学院 (開講科目、講師紹介、著書紹介)
- ▶ 専任研究員紹介、書籍案内
- ▶ 公開講座、イベントのお知らせや開催レポートなど

さまざまな情報が随時更新されております。ぜひご覧下さい。

